

“Wakefield”論

——ウェイクフィールド夫人の人物造型を中心に——

藤吉 清次郎

(高知大学教育研究部人文社会科学系人文社会科学部門)

“Wakefield”

—— Chiefly about the Characterization of Mrs. Wakefield ——

Seijiro Fujiyoshi

*Kochi University Research and Education Faculty Humanities and Social Science Cluster
Humanities and Social Science Unit*

Abstract: The purpose of this paper is to examine the characterization of Mrs. Wakefield in Hawthorne’s short story “Wakefield” (1835) and to analyze Mr. Wakefield’s incomprehensible deeds on the basis of this examination. Although Hawthorne is said to have created “Wakefield” by using the account about Mr. and Mrs. Howe in William King’s *Political and Literary Anecdotes of His Own Times* (1818), Mrs. Wakefield is different from Mrs. Howe in characterization. While Mrs. Howe suffers as a consequence of her husband’s disappearance, we can confirm that Mrs. Wakefield is not so surprised and troubled by her husband’s for two reasons. One reason is that she notices that her husband is selfish enough to cheat her. The other is that she grows “portly” and “well conditioned,” leading a wholesome life even during his long absence. In a way, we may say that she is suggestively described as a strong woman who can live alone without depending on her husband. After all, Mr. Wakefield, who probably wanted his wife to realize how important he was to her by disappearing from her, ironically realizes that he is meaningless to her. The existence of Mrs. Wakefield highlights her husband’s fragility, triviality, and alienation. In this way, we can gain a better understanding of “Wakefield” by paying more attention to Hawthorne’s characterization of Mrs. Wakefield.

キーワード：都市，卑小性，疎外，グロテスクな影

Keyword: City, Triviality, Alienation, Grotesque Shadow

はじめに

ナサニエル・ホーソン(Nathaniel Hawthorne, 1804-1864)の短編「ウェイクフィールド」(“Wakefield,”1835)は夜馬車で田舎に行き、おそくとも3, 4日したら帰ると妻に告げ、家を出たあと、通りをひとつ隔てたところに家を借り、髪を被って変装し、20年間妻の様子を観察しつづけ、最後に「わずか一日家をあけたというそぶり」(IX130)家に帰るといふ男の話である。¹ この物語には読者をとまどわせる点が多々ある。ウェイクフィールドはなぜ20年間も妻を観察し続けるのか。また20年間も消息不明の夫を妻はなぜ積極的に捜索しないのか。夫妻が10年を経てロンドンの通りで出会う場面で夫はやせ衰えているのに、夫人はなぜ健康的に太っているのか。ウェイクフィールドが家に帰ることを決める直前に彼が窓越しに目撃する天井に映る妻のグロテスクな影は何を暗示するのか。20年間も放っておかれたウェイクフィールド夫人はなぜ、夫をやすやすと家に迎え入れるのか。また、語り手はウェイクフィールドが帰還後、「死に至るまで優しい伴侶になりおおせた」(IX130)と述べるが、この言葉は果たして額面通りに解釈してよいものか。

以上のような謎・疑問は、夫の行動の不可解さもさることながら、夫人の不可解な人物造型にも起因していると考えられる。しかし従来の批評では、夫人の人物造型、また夫の失踪と夫人の関係について十分には論じられてきていない。そこで本論では夫人の人物造型を考察し、先に述べた謎・疑問の解明を試みたい。手順としては、まず、ホーソンが創作にあたり参考にしたと思われる、ウィリアム・キング(William King)の *Political and Literary Anecdotes of His Own Times* (1818)の中のハウ(Howe)夫妻に関する記事の分析から始めることにする。² 次に、キングの記事の分析を踏まえて、ホーソンがキングの記事をどのように改変しているかを確認する。その上で、物語におけるウェイクフィールド夫人の人物造型の意義を論究したい。

I

ウィリアム・キングが叙述するハウ夫妻の記事を丁寧に見ていこう。時は1706年頃。場所はロンドン。キングは記事の注釈で当時のロンドンについて、“London is the only place in all Europe where a man can find a secure retreat, or remain, if he pleases, many years unknown. If he pays constantly for his lodging,..., nobody will ask a question concerning him, or inquire whence he comes, whither he goes, &c.”(King240)と述べ、まずロンドンの都市の意義を指摘する。(ホーソンも都市の意義を十分意識しており、「ウェイクフィールド」の舞台もロンドンになっていることは重要である。)続いてハウ夫妻の紹介と、ことの顛末の説明が手短になされる。ハウは分別のある人柄のよい人物であり、年に700~800ポンドの収入を得ていた。一方、夫人は容姿も作法もよい女性であり、よき妻であった。結婚して7, 8年後ハウはある朝早く、仕事で出かけるに妻に告げて家を出るが、同日の昼、妻は夫から3週間か、1ヶ月ほどオランダに滞在するとの知らせを受け、そのあと17年間消息不明となる。17年目のある晩、何人かの友達、ハウ夫人の妹、彼女の夫で医者でローズ(Rose)と夕食をとっているとき、明日、聖ヤコブ公園で逢いたいという差出人不明の手紙が届くが、その筆跡からそれがハウからのものであることがわかり、夫人は驚きのあまり気絶してしまう。翌日ハウ夫人は皆と一緒にヤコブ公園に行くと、そこにハウが現れる。彼はみんなと挨拶を交わし、夫人を抱擁したあと、家に帰り、夫妻は死ぬまで仲むつまじく暮らしたという。

この後キングは、“But the most curious part of my tale remains to be related.”(King240)と述べ、ハウの失踪の特異性を指摘する。ハウは夫婦で住んでいた家からそれほど離れていないところに週5, 6シリングで部屋を借り、名前を変え、「黒いかつら」をかぶり変装する。こうしたハウの行為の目的が別人となって自分の失踪を引き起こす状況を観察することにあることは明らかである

う。より具体的にはハウは自分の失踪が妻に及ぼす影響を探りたかったのであろう。

夫の失踪から2, 3年後, 夫人は生活ができなくなり, 夫の財産の使用許可を議会に申請することを余儀なくされる。³ キングはハウがコーヒーハウスにおいて新聞を読み, その手続きの進行状況を楽しんだと述べ(King241), 妻を苦しめることによって歓びを得る彼のサディスティックな一面を指摘する。その意味ではハウの目的は成功していると言える。実際夫人は当初夫の失踪があまりにも突然であったために, 夫が自分の知らない大きな負債を抱え込んだか, あるいはどうしようもない困難な状況に巻き込まれたのではないかと想像し, 数日間債権者の催促や差し押さえにおびえながら暮らしたという(King242)。結局, 家は抵当に入っておらず, 取引先への支払いもすべて済まされていたことが判明するのだが。

次に, キングは夫人の生活状況の変化を報告しつつ, ハウの行動, 特に夫人に対する彼の執着心について述べていく。夫人は2人の子供を相次いで亡くしたため, 召使いの数を減らすことによって家計費を少なくすることが適切だと考え, ゴールデン広場のブリューア通りの小さな家に引っ越すことになる。夫人が引っ越した家の真向かいにトウモロコシ商人であるソールト(Salt)という名前の人物が住んでおり, ハウは失踪から10年が経ったころ, この人物と非常に親しくなり, 彼の家で週に1, 2度食事をするようになる。実は2人が食事をしている部屋から, ハウ夫人の家の台所をのぞき込むことが難しくなかったという。皮肉なことに, ハウが独身であると思いこんだソールトはハウ夫人を結婚にふさわしい相手だとして彼にしばしば勧めたというが, それはおそらくこの人物が夫人を家庭的な女性だと判断したからだと推察される。

もちろん, ハウが妻を観察するのはソールトの家からだけではない。17年の失踪生活のうち, 残りの7年間, 彼は毎週教会に通い, 妻の姿を観察しつづける。ハウはソールトの席に座ることによって気づかれることなく, 妻を観察することができたのである。そして失踪から17年後, ハウはついに, わが家に戻ることになる。ただ, ハウが妻の元に帰ってきた理由については, 夫人の妹の夫であるローズ医師がキングに向かって, ハウがおそらく1000ポンドか2000ポンドのお金をもって失踪しており, それを使い切っていなければ, 夫人の元には決して帰っていなかっただろうと思うと頻繁に言っていたと述べられる。

以上がキングによるハウの失踪に関する記事の概要であるが, キングは帰還したハウについて次のように述べる。

After he returned home, he never would confess, even to his most intimate friends, what was the real cause of such a singular conduct; apparently, there was none: but whatever it was, he was certainly ashamed to own it.(King 244)

ハウは最も親しい友達にもその奇妙な行動の本当の理由を告白しなかったという。見たところそのような行動をとる原因など無かったように思えるが, しかしそれがなんであれ, 彼が恥ずかしくてそれを認めることができないことだけは確かであったと述べられている。告白できないような動機とは一体何だろうか。

以上のように, キングの記事において, 自身の失踪が妻に及ぼす影響を探るためにハウが姿を消したことは理解できるが, しかし彼の内面心理は踏み込んだ形で述べられておらず, なぜ彼が妻を観ることに固執するのか, なぜ17年後彼が妻のもとに戻ってきたか, など不明なままである。彼の帰還はローズ医師が指摘するように, お金がなくなったことが原因かもしれないが, 確かなことは妻に対する感情がいかなるものであれ, ハウが妻に対して関心を持ち続けたということである。一方, 夫人のほうは, 夫の失踪に伴う彼女の心理と行動が具体的にわかりやすく描かれていると言

える。つまり夫の謎の失踪によって当然生じる夫人の不安、あるいは経済的状況が丁寧に描出されているのである。夫人のまわりの人々は不幸な状況にある彼女に同情し、彼女を支援していたと推察される。ある意味で、ハウ夫人は夫の異常な行動に翻弄される平凡で家庭的な女性として描かれていると言えるだろう。⁴

II

キングのハウ夫妻の記事を念頭において、短編「ウェイクフィールド」を読むと、ホーソーンの作家としての関心の在り方が理解できる。ホーソーンはキングの話で詳細に述べられている夫妻の経済的な問題、子供の件、他の登場人物（夫人の妹夫妻、ハウの友達ソールト）など、物語に不要だと思われるものをすべて省いた上で、登場人物を夫妻のみに絞り込み、語り手による夫の性格分析の部分を効果的に拡充し、その一方で（ハウ夫人に較べると）夫人の内面に関する情報を極力抑えて描いている。このような描き方はホーソーンがキングの記事から得た文学的素材、つまり凡庸な人間が引き起こす謎の失踪に見られる人間心理の不可解さ、あるいは人間存在の曖昧性を最大限に描き出すために必要であったと考えられる。「ウェイクフィールド」に対する今日の評価とその影響力を考慮に入れると、ホーソーンの文学的戦略は十分成功していると言えるだろう。⁵ アルゼンチン人作家ホルヘ・ルイス・ボルヘス（Jorge Luis Borges）は、この短編が主人公の「深遠なる卑小さ」（“profound triviality”）と「不可解な罪と罰の世界」（“a world of enigmatic punishments and indecipherable sins”）を描くカフカの不条理の物語だとして最大級の賛辞を送っている（Borges56）。また柴田元幸氏は、19世紀前半期の都市の成立と作品の關係に着目し、ホーソーンがこの物語において、都市における人間の無名性という20世紀の問題を先取りするような形で描いていると指摘している（柴田 289）。

もちろん、ボルヘスや柴田氏の見解は物語の核心、特にウェイクフィールドの人間像の本質を突くものであり、妥当なものである。しかし、このような見解だけでは、ウェイクフィールド夫人の人物造型に関する疑問点は解明できないように思われる。具体的には（前述したように）精神的に苦しい状態にあるはずのウェイクフィールド夫人がなぜ健康的に太ってくるのか、あるいは家に帰ることを決める直前に彼が窓越しに目撃する天井に映る夫人のグロテスクな影は何を暗示するのか、そしてなぜ夫人が夫をやすやすと受け入れるか、という疑問点である。キングの描くハウ夫人の人物造型とは全く異なるこのウェイクフィールド夫人の不可解な人物造型は、ウェイクフィールドの失踪の問題を探る上で重要な手がかりとなっていると思われるので、夫人に焦点をあてて考察してみたい。

まず、ウェイクフィールド夫人が夫の失踪に当惑もせず、長期に亘り冷静さを保っていたのか、その要因を検討してみよう。語り手は物語冒頭で、ウェイクフィールド夫人が夫の失踪を必ずしも不自然なものと捉えていないことを仄めかしている。語り手は友達が知っているウェイクフィールドの人物像に、夫人が違和感を覚えている点を次のように述べている。

Had his acquaintances been asked, who was the man in London, the surest to perform nothing today which should be remembered on the morrow, they would have thought of Wakefield. Only the wife of his bosom might have hesitated. She, without having analyzed his character, was partly aware of a quiet selfishness, that had rusted into his inactive mind—of a peculiar sort of vanity, the most uneasy attribute about him—of a disposition to craft, which had seldom produced more positive effects than the keeping of petty secrets, hardly worth revealing—and, lastly, of what she called a little strangeness.

sometimes, in the good man. (IX131-32; undermines mine)

結婚して10年になるウェイクフィールドは非常に凡庸な中年男性であり、ロンドンに住む人々のうちで、翌日みんなが記憶しているような行為を今日最も為しそもない者を問われれば、彼の友人たちは彼を思い浮かべただろうが、しかし彼の妻だけは躊躇したかもしれないという。それは夫人がこの善良な夫の「不活発な心の奥でひっそりと錆び付いている自己本位の性」、「独特の虚栄心」と「企みずきの気質」(“disposition to craft”)を感じとっていたからである。

語り手はそのようなウェイクフィールドの性質を具体的に示すものとして彼が浮かべる「笑い」(“smile,” IX132)を指摘する。夫人は、夫が旅のために家を出かける際、ふたりは接吻を交わし別れるが、夫が玄関の扉を閉めて立ち去ったのち、夫人がふとみると扉はわずかに開いており、そのすきまから夫の「笑み」を目撃してしまう。そのため、妻であった年月よりも未亡人であった年月の方が長くなってから、この「笑み」は夫人の胸裏によみがえり、彼女はその「笑み」に無数の夢想を付与していく。例えば、棺に入ったウェイクフィールドの姿を思い描くとき、その青白い顔には例の「笑み」が見られるし、また天国にいる夫を夢想しても、その霊もやはり「物静かで狡猾な笑み」(“quiet and crafty smile”)を浮かべている(IX133)。語り手によれば、この夫の「笑み」によって夫人は自分が本当に未亡人であろうかと疑わずにはおれないのである(IX133)。

実際、この箇所を除けば、物語においてウェイクフィールド夫人の内面心理が直接的に描かれることはない。しかし、夫人が夫の失踪の最中も精神的に安定した生活を送っていたらうことは彼女の健全そうな身体から推察できる。例えば、ウェイクフィールドが失踪して10年後、夫妻がロンドンの雑踏のなかですれ違う印象的な場面がある。この場面で語り手は10年間未亡人として過ごした夫人の様子を、ウェイクフィールドのそれと比較しながら、克明に描き出している。ウェイクフィールドは「身体はやせて、低く狭い額には深い皺が刻み込まれ、光を欠いた小さな目はときどき、不安げにあたりをうろろと見回したりしている」(IX137)が、一方教会に向かう夫人の姿は夫のそれとは対照的である。

...a portly female, considerably in the wane of life, with a pray-book in her hand, is proceeding to yonder church. She has the placid mien of settled widowhood... Just as the lean man and well conditioned woman are passing, a slight obstruction occurs, and brings these two figures directly in contact. Their hands touch; the pressure of the crowd forces her bosom against his shoulder; they stand face to face, staring into each other's eyes. After a ten years' separation, thus Wakefield meets his wife! ... The sober widow, resuming her former pace, proceeds to church, but pauses in the portal, and throws a perplexed glance along the street. She passes in, however, opening her prayer-book as she goes. (IX137-38; underlines mine)

やせ衰えた夫とは対照的に夫人は「恰幅がよく」、「健康的な」女性になっており、それは彼女が精神的にも安定していることをも意味するだろう。こうしてウェイクフィールド夫妻は劇的な再会果たすのだが、お互いの身体に触れ合い、そして互いの目を凝視したにも関わらず、夫人はそれが夫だと気づかない。確かに彼女は一瞬、教会の入り口で「戸惑いのまなざし」を通りに向けるが、彼女は夫を認識するに至らないのである。夫人が夫を認識できない理由としてはまず、語り手が指摘しているように、都市が舞台となっていることから、ウェイクフィールドがすでに「ロンドンの都市社会に溶け込み」(“melt into the mass of London life,” IX133)、群衆のひとりになり、「個性」

(“individuality,” IX133) を喪失してしまっていることが考えられる。あるいは変装している上に、やせて人相が変わっていることがあるかもしれない。だが、上記のような場面においても夫人が夫のことを深く愛しているならば、相手に気づくのではないだろうか。

いずれにしても、夫の失踪から10年間、夫人は夫とは対照的に、その健全な身体が暗示するように不安・苦悩に苛まれることなく、安定した生活を送っていたと判断される。ある意味で、夫人の安定した精神状態は部分的には、彼女が夫の内面に潜む虚栄心と狡猾さを鋭く見抜いていることに起因しているのかもしれないが、しかし通りで夫妻が互いの身体に接触し、互いの目を凝視したにもかかわらず、彼女が夫に気づかなかったという事実は見逃すことはできない。この点については、ウェイクフィールド夫人の人物造型における重要な要素であると思われるので、後にさらに分析を加えることにする。

III

次に、ウェイクフィールドの失踪と帰還の理由を確認しておこう。その上で、夫人がなぜ理不尽なことをした夫を家に迎え入れたかを考察してみたい。

まず、ウェイクフィールドの失踪は、語り手によれば、彼がいなくなることで回りにいかなる影響が生じるかを確かめ (IX134)、あるいは一週間まるまる家をあけて妻を困らせてやろうとしてなされたのである (IX132)。だが、その程度の期間であれば、ホテルに宿泊すればよいのではないだろうか。 “[W]e find him comfortably established by the fireside of a small apartment, previously bespoken.” (IX133) の箇所からわかるように、彼は前もってアパートを予約していたのである。アパート予約の理由は自分の企てが長い期間を要するものであることを彼がうすうす察していたからであろう。彼は10年間の結婚生活において、妻の本心（自分に対する愛情）を十分には理解できず、長期にわたる失踪という手段によって自分の存在の大きさを妻に悟らせたかったのではないかと推察される。⁶ それは “He will not go back until she be frightened half to death.” (IX136) という彼の決心からも窺い知れる。

しかし、ホーソーンが描く、夫人に対するウェイクフィールドの心理はもう少し複雑なものである。例えば、失踪から3週目、妻が病気になり、葬式の前触れとおぼしき医者が現れた際のウェイクフィールドの心理について語り手は次のように述べている。

Towards night-fall, comes the chariot of a physician, and deposits its big-wigged and solemn burthen at Wakefield's door, whence, after a quarter of an hour's visit, he emerges, perchance the herald of a funeral. Dear woman! Will she die? By this time, Wakefield is excited to something like energy of feeling, but still lingers away from his wife's bedside, pleading with his conscience, that she must not be disturbed at such a juncture. If aught else restrains him, he does not know it. (IX136; underlines mine)

ウェイクフィールドは3週間近くひとりで暮らした妻が病気で重態であることを知り、興奮している。ここにはハウの場合と同じように、ウェイクフィールドのサディスティックな一面が窺われる。つまり、このとき彼は無意識のレベルで、憎しみの対象でもある妻が苦しんでいることに歓びを感じているのである。彼が妻に対してそのような負の感情を持っていることは確かだが、しかし妻は彼にとって愛の対象でもあるはずだ。その点を考慮に入れると、「こんなときに彼女の邪魔をしてはいけない」と自らの良心に言い聞かせて、妻の枕元に行こうとしないウェイクフィールドの行動は不可解である。なぜウェイクフィールドは帰還しようとならないのか。それは3週間の失踪におい

て彼が真の意味で妻の本心、あるいは彼女の正体を見極められていないと感じていたからであろう。失踪から20年目にウェイクフィールドはついに、妻の正体を垣間見ることになる。それは秋の風の強いある晩のことである。彼は、我が家へ行き、妻のいる2階の居間の窓の向こうに興味深い光景を目撃する。

Pausing near the house, Wakefield discerns, through the parlor-windows of the second floor, the red glow, and the glimmer and fitful flash, of a comfortable fire. On the ceiling, appears a grotesque shadow of good Mrs. Wakefield. The cap, the nose and chin, and the broad waist, form an admirable caricature, which dances, moreover, with the up-flickering and down-sinking blaze, almost too merrily for the shade of an elderly widow. (IX139; underlines mine)

ウェイクフィールド夫人のグロテスクな影が天井に映っている。その影は、「燃えあがってはまた沈んでいく炎にあわせて、初老の未亡人の影にしては、あまりにも陽気すぎるほど陽気に踊っている。」これはおそらく、妻の内面に秘められた情熱・生命力を暗示的に描き出したものであろう。大場厚志氏も鋭く指摘しているように、この影には「悪とされる反道徳的・反社会的なものや、女性に期待される『家庭の天使』という役割に抵触するもの」が含まれるだろう（大場19）。この影によって示されるウェイクフィールド夫人の人間像は、キングの描く「家庭的な女性」であるハウ夫人のそれとは対照的である。このように「グロテスクな影」というような暗示的な表現を使っているところに、夫人に対するホーソーンの関心の高さが窺われる。つまりウェイクフィールド夫人はホーソーンが後に長編小説で描く「ダーク・レディー」——その豊かな生命力と烈しい情熱のために姦通の罪や近親相姦の罪を犯す魅惑的な強い女性であり、家庭的で男性に服従的な女性である「フェア・レディー」とは対照的な存在である——の系列に属する女性であり、暗示的に描く必要があったと考えられる。

上記のような妻の「グロテスクな影」をみた瞬間のウェイクフィールドについて、語り手は“*At this instant, a shower chances to fall, and is driven, by the unmannerly gust, full into Wakefield's face and bosom.*” (IX139) と述べているが、この描写は彼が妻の正体を垣間見、烈しい衝撃を受けたことを暗示するものであろう。こうしてウェイクフィールドは目的を果たし、20年に及ぶ探求の旅は終わりを告げることになるのだ。このあと秋の冷たい夜風が身にしみたウェイクフィールドは語り手が賢明な行動として推奨するように、家庭の温かみと自らの居場所を求めて家に帰っていく。⁷ では、彼は探求の旅を通じて、人間的成長を遂げたのであろうか。この点、語り手は家に入る際の彼の様子を次のように述べている。

As he passes in, we have a parting glimpse of his visage, and recognize the crafty smile, which was the precursor of the little joke, that he has ever since been playing off at his wife's expense. How unmercifully has he quizzed the poor woman! (IX139-40; underlines mine)

語り手は彼が20年前、家を出る際に浮かべていた例の「狡猾そうな笑い」を浮かべていると指摘している。この点、Nancy Bunge が“*Wakefield returns having learned nothing and smirks at his wife because the same arrogance that freezes him renders him incapable of admitting failure.*” (Bunge 40) と指摘しているように、この「狡猾な笑い」は彼が自らの過ちを反省しておらず、従

って彼が何ら精神的成長を遂げていないことを示唆している。ただ、ここで注目しておきたいことは、20年前の「笑い」と現在の「笑い」が質を異にしていることであろう。大場氏が指摘するように、20年前の「笑い」が妻への優越感に満ちたものであったのに対して、現在の「笑い」は悪戯っ子が母親に向けたものに等しいのである（大場26）。その「グロテスクな影」が暗示するように、成熟した強靱な女性である妻を前に、ウェイクフィールドは子供のような「笑い」によってその未熟さを露呈してしまっている。このように帰還したウェイクフィールドが浮かべる「狡猾な笑い」に注目するとき、われわれ読者は物語の冒頭部における、帰還後彼が「優しい伴侶として過ごした」という語り手の言葉を額面通りには受け入れることはできないのである。

*

*

以上のように、物語の結末で、ウェイクフィールドは足取りは重いものの、平然と家に入っていくのであるが、一方、夫を迎え入れる夫人の様子は一切描かれていない。しかしウェイクフィールドの帰還の場面で、語り手は、「彼がドアを開けた」ではなく、“**The door opens.**”(IX139)と言う。これは夫人が自らドアを開けて夫を迎え入れたと解釈することもできるわけだが、いずれにしても、夫人はなぜ無慈悲な行為をした夫を受け入れたのであろうか。ウェイクフィールド夫人の人物造型について、作家の小島信夫は次のような示唆に富む見解を提出している。

彼女が結婚したとき、彼女は彼という男である人間のことを予想していた。彼の企みさえも含めて知っていた。彼は問題ではなくて、彼の企みが問題であり、企みを持たねばならぬ人間というものそのものが問題であり、そのために結婚したのだろう。最初から彼女はひとりであった。彼がこのような積極的な企みの挙に出なかったのだったら、彼女がロンドンの街の中へ（中略）出むいて行き、早くも夫とすれちがっても、気がつかなかったことであろう。(小島113)

小島の解釈を敷衍すれば、彼女にとって結婚とは好きな人と結ばれるという類のものではなかったのである。彼女はおそらく結婚した後も夫と連帯意識を持たず、ずっと孤独であったと推察される。夫人にとって、ウェイクフィールドのような男などあまりにも見え透いた、ちっぽけな存在であったのである。ウェイクフィールドは失踪という手段で妻に挑んだが、それは言わば、大人と子供の戦いであった。彼は妻のことを全く理解できていなかったが、妻のほうは、夫の企みを把握しており、彼がいずれ戻ってくることを知っていたのである。いずれにしても、ウェイクフィールド夫人が、小島が指摘するような女性であれば、彼女が20年に亘る夫の失踪にも不安や苦悩に苛まれずに、ある意味健全に生きてこられたことも十分理解できるのである。

このように考えると、夫が戻ってきたからといって、夫人の生活が一変するとは考えがたい。夫人はこれからも、夫と真の意味での心の交流をもつことなく、淡々と夫婦生活を送っていくだろうことが予想される。このようなウェイクフィールド夫妻の在り方は「ウェイクフィールド」とほぼ同じ時期に書かれたホーソーンの傑作短編「ヤング・グッドマン・ブラウン」(“**Young Goodman Brown**,”1835)のブラウン夫妻のそれを想起させる。

夜の森で牧師をはじめとする、町の偉い教会関係者たちばかりか、妻のフェイス(Faith)までもが悪魔の集会に参加しているのを目撃した(と思いこんだ)ブラウン(Brown)は以後、町の人々ばかりか、妻さえも信頼できなくなり、夫婦生活も非常に暗いものとなる。「ヤング・グッドマン・ブラウン」においても妻のフェイスの内面は描かれておらず、彼女が夫のブラウンをどのように思っていたかわからないが、しかし件の夜以来、彼が常に不信の目を向け、自分を愛してくれなくなったことにフェイスが気づいていないはずはない。⁸にもかかわらず彼女はそうした状況を意に介さ

ず、たくましくも、平然と夫婦生活を送り続け、その長い人生において何人もの子供を産み、多くの子孫を残したのである(X89)。ある意味で、フェイスはウェイクフィールド夫人以上にたくましい女性なのかもしれない。以上のように、脆弱な夫とたくましい夫人の組み合わせ、そして心の絆・愛を欠いた夫婦生活という点で、ウェイクフィールド夫妻とブラウン夫妻は酷似しているといえるだろう。⁹

むすび

ホーソーンはキングの伝えるハウの失踪記事を基にして「ウェイクフィールド」という物語を生み出した。この作家はその記事を物語化するにあたり、夫人の内面に関する情報を極力抑え、語り手による夫の性格分析の部分を効果的に膨らませることによって、人間存在の曖昧性と人間心理の不可解さを巧みに描き出している。その結果、この作品は単なる道徳的解釈では捉えることのできない現代的要素を有する物語に仕上がっている。

多くの批評家が指摘しているように、ウェイクフィールドという男の存在は、都市に生きる卑小で孤独な人間像を体現しているのであるが、¹⁰しかしこのような人間像を真に理解しようとするとき、ウェイクフィールド夫人が果たす役割を意識せざるを得ないのである。これまで考察してきたように、ウェイクフィールドの失踪の主要な目的は自分の存在の大きさを夫人に知らしめ、と同時に彼女の本心・正体を確かめることであったが、夫の20年にも及ぶ失踪にびくともしなかつた夫人の強靱さ、それを暗示する彼女の踊る「グロテスクな影」は皮肉にも、彼の脆弱さ、卑小さ、疎外感を一層際立たせている。このように、ウェイクフィールド夫人の人物造型が有する意義に注目することによって、われわれ読者は「ウェイクフィールド」という物語のもつ新たな側面を認識することになるのである。

注

1. ホーソーンの商品に関しては、*The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne* XXIII.(Columbus: Ohio State UP, 1962-97)を使用した。巻数、頁数は引用文に続けて括弧に入れて示す。
2. キングのハウの記事に関しては、L.B.V. Newmanが“Hawthorne,...,changes some details, omits others, but retains the emphasis on the husband's apparent lack of motivation.”(312)と述べ、分析を加えているが、しかしウェイクフィールド夫人の人物造型には十分な考察は加えられていない。
3. ハウ夫人が議会に夫の財産の使用許可を請求したということは、彼女が夫の失踪に伴い、警察に捜索願を出したということの意味するだろう。ホーソーン「ウェイクフィールド」ではそのあたりのことが全く触れられておらず、あるいは問題にされておらず、その意味においてこのホーソーンの商品は、この作家自身が*The House of the Seven Gables*(1851)の序論で述べる「ノヴェル」と「ロマンス」の定義に従えば(II1-3)、日常社会の約束事に縛られる「ノヴェル」というよりもむしろ、「心の真実」を描き出すためにはその約束事に必ずしも縛られない「ロマンス」であるといえるだろう。
4. ただ、ハウ夫人の言動に関して謎がないかというと、そうではない。それは夫の失踪中に二人の子供を失い、(夫の失踪のために)生活に困窮した夫人がなぜ夫を受け入れたかということである。
5. 現代アメリカ文学の代表的作家ポール・オースター(Paul Auster)は「ウェイクフィールド」の影響を受けて*Ghosts* (1986)という作品を発表している。
6. Leland Personはウェイクフィールドが妻のもとから去ったのは彼の「気まぐれ」(“whim”)によ

- るものだろうと指摘しているが (Person49), 本論の立場からいえば, 自分に対する妻の愛情を確認し, 同時に彼女を懲らしめる目的で彼が計画的に失踪したと考えたい.
7. ウェイクフィールドが家に帰る決心をしたことについて, L. Person も “[H]is decision seems a product of whim, the result of pausing one night before his house and noticing the ‘comfortable fire’ on the hearth.” (Person50) と述べている.
8. ブラウンが妻のフェイスに不信の目を向けていたことは次のような描写からわかるだろう.
“Often, awakening suddenly at midnight, he shrank from the bosom of Faith, and at morning or eventide, when the family knelt down at prayer, he scowled, and muttered to himself, and gazed sternly at his wife, and turned away.” (X 89 ; underlines mine)
9. 短編 「ヤング・グッドマン・ブラウン」や「ウェイクフィールド」など, ホーソーンの初期の作品においては, *The House of the Seven Gables* —フィービー(Phoebe)という家庭的な女性がホールグレイブ (Holgrave) という若者を救う役割を担っている—などの場合とは異なり, 女性は邪道に迷い込もうとする男性を救い, 日常世界の幸福を約束する存在としては必ずしも描かれていない.
10. ウェイクフィールドの人物造型について, Brenda Wineapple は “[T]o Hawthorne, Wakefield is also an artist— the artist as crafty nincompoop— severed from world, having abandoned ‘his place and privileges with living men, without being admitted among the dead.’ ” (Wineapple86) と述べ, 妻の心を観察することに固執するあまり, 現実世界から逸脱しまうこの男性の姿にホーソン自身の作家としての宿命が投影されていると指摘している.

Works Cited

- Borges, Jorge Luis. “Nathaniel Hawthorne.” In *Other Inquisitions 1937-1952*.
Trans. Ruth L.C. Simms. Austin: Univ. of Texas Press, 1964, pp.47-65.
- Bunge, Nancy. *Nathaniel Hawthorne: A Study of the Short Fiction*. New York: Twayne Publishers, 1993.
- Hawthorne, Nathaniel. *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*.
Ed. William Charvat et al., 23vols. Columbus: Ohio State UP, 1962-97.
- King, William. *Political and Literary Anecdotes of His Own Times*. London: John Murray, Albemarle-Street, 1818.
- Newman, Lea Bertani Vozar. *A Reader's Guide to the Short Stories of Nathaniel Hawthorne*.
Boston: G.K. Hall Co, 1979.
- Person, Leland. *The Cambridge Introduction to Nathaniel Hawthorne*. New York: Cambridge UP, 2007.
- Wineapple, Brenda. *Hawthorne: A Life*. New York: Alfred A. Knopf, 2003.
- 大場厚志 「グロテスクな影のダンス——「ウェイクフィールド」の結末をめぐる——」
NHSJ 『フォーラム』 No.7, 2001年, pp.17-33.
- 小島信夫 「ウェイクフィールドの妻」『文学とアメリカ III——大橋健三郎教授還暦記念
論文集』南雲堂, 1980年, pp.72-75.
- 柴田元幸 「探偵になったウェイクフィールド」『新潮』1月号, 2003年, pp.286-95.

平成25年(2013)9月30日受理

平成25年(2013)12月31日発行